

[教育実践報告]

看護専門科目におけるサービス・ラーニング導入効果の検討 ～健康調査の集計・分析・報告の実践を通して～

戸 渡 洋 子 荒 木 善 光

Investigation of the Effectiveness of Introducing Service Learning in a Nursing Course:
Through the Practice of Tabulating, Analyzing, and Presenting Health Surveys.

Yoko TOWATARI, Yoshimitsu ARAKI

和文抄録

- [目的] 本研究の目的は、看護専門科目にサービス・ラーニングの一部を導入することによる、看護学生および市民への効果を明らかにすると共に、今後の課題を検討することである。
- [方法] サービス・ラーニング前後に学生・市民への質問紙調査を実施した。また、学生にグループインタビューを実施し、先行研究による評価指標を用いて演繹的に分析した。
- [結果] 質問紙調査の有効回答（学生16人・市民19人）を前後比較し、学生では、進路の明確化や、地域社会を支える責任感や効力感の向上、市民では、大学との関わりにおける肯定的な回答割合において改善を認めた。学生のグループインタビューでは、「貢献活動に関する関与」について語られた割合が最も高かった。
- [考察] 本研究により、学生および市民において、サービス・ラーニングの一部を導入することによる一定の効果が示唆された。しかし、部分的な導入であったことによる課題や限界を認めた。

キーワード：サービス・ラーニング，看護学生，市民，有効性

I 緒言

2019年に保健師助産師看護師学校養成所指定規則¹⁾が一部改正され、2022年度から看護師等養成所において新たなカリキュラムが適用されることとなった。この改正の特筆すべき事項のひとつに、看護師指定規則専門分野の「在宅看護論」が「地域・在宅看護論」と名称変更、および単位増されたことがあげられる。その背景には、入院期間の短縮化等による在宅医療・外来医療や、地域包括ケアシステム構築の推進が進展する中、療養する人々の生活の場が、自宅や介護施設などへ多様化していること、また、超高齢化によって人々の疾病構造や健康概念が変容していること等があげられる。これらの社会

的变化に伴い、看護専門職には、対象を生活者として捉えて看護サービスを提供するという役割がますます求められるようになっており、よって、看護基礎教育において、地域社会に目を向け人々の健康に影響を与える社会的側面について思考し対応する力を養う重要性が、より高まっていると言えよう。

このような、社会との関係性を意図的に組み込んだ学習方法のひとつにサービス・ラーニング (Service Learning; 以下, SL) がある。Furco²⁾によれば、SLは米国の教育学者デューイの「経験主義教育」に源流を持ち、アクティブ・ラーニングの中でも、学生の学びのみならず、社会にも有益な結果をもたらすことを目指そうとする経験学習であり、地域社会への貢献と社会的学習を組み合わせた活動

所属

熊本保健科学大学 保健科学部 看護学科

責任著者：戸渡洋子 towatari@kumamoto-hsu.ac.jp

に学生を参加させることを目的としている（図1）。

SLは、主に米国において1990年代から、看護、薬学、理学療法、医学など、数多くの健康科学における高等教育に取り入れられており、概念理解の深化や技術の強化などの教育的効果に加えて、共感力・コミュニケーション力などの非教育的効果を向上させることが明らかにされている^{3), 4)}。特に、米国での看護学生のSLに注目すると、大学と地域との互惠関係を基盤とした、地域ケア関連の学際的、地域参加型学習方法としての運用が報告されており、看護学生の専門スキルの向上や市民への効果が認められている^{5), 6)}。また、日本における看護学生を対象としたSL研究では、総合科目に導入し、「リーダーシップ、コミュニケーション力」等の力量形成^{7), 8)}に至った例や、専門科目「地域看護学」・「老年看護学」の一環として導入し、「高齢者を通じた地域への理解の深まりや、高齢者を取り巻く地域や環境への視野の広がり」⁹⁾を認めた等の効果が明らかにされている。

これらのことから、学生の学びのみならず、社会にも有益な結果をもたらすことを目指そうとするSLを高等教育の看護師養成課程に導入する意義は大きいと考える。

一方で、SL実践学習支援体制を整えること¹⁰⁾や、調整に困難を伴う¹¹⁾などの課題が報告されており、大学機関の準備体制の構築に労力を要す実情が、その導入を困難にしていると考えられる。また、SLでは、サービス、すなわち社会貢献の質を担保する

ために、SLを導入する大学が、学生およびすべての関係者への効果について評価する必要があるとされる¹²⁾ものの、日本における看護学生を対象としたSL研究では、学生の学びへの効果と共に、市民等の関係者への効果や社会への有益性が同時に評価されている報告はない。

今回、我々は、大学近隣市民により展開されてきた「健康まちづくり活動」において、看護学生の地域アセスメント技術を活かした「健康調査の集計・分析・報告の実践」による社会貢献の機会を得た。そこで、本研究では、看護専門科目の単科目において、社会貢献を意図したSLの一部を導入し、さらに、米国のSLの質保証を目指した先行研究¹³⁾を参考に、学生および市民への効果を評価することを試みた。これによって、高等教育における看護専門科目にSLを導入する効果を明らかにし、看護基礎教育においてSLを導入する意義と今後の課題について検討する。

II 方法

1. 用語の定義

サービス・ラーニング (SL) : Furco²⁾によればSLは、学生の学びのみならず、サービスの対象への有益性にも重きを置くアクティブ・ラーニングである。本報告では、看護学生を対象としたSLの先行研究¹⁴⁾を参考に、SLを「学生が教室で学んだ知識・技能を、社会的活動に生かすことを通し、地域

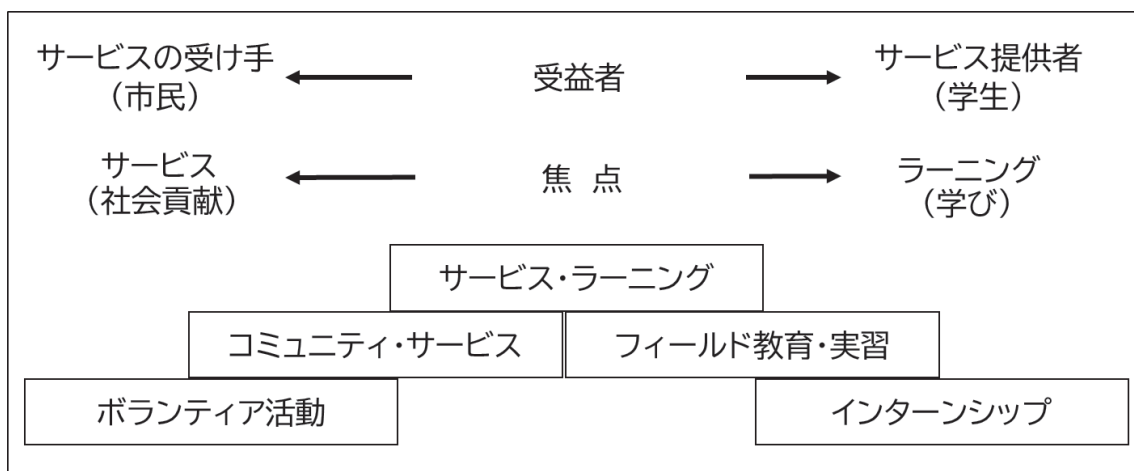


図1 Furco, A²⁾による経験学習の類型

～サービス（社会貢献）とラーニング（学び）の焦点と受益者の差異～
(Furco, A 1996, p3, Fig-2 を筆者和訳・一部加筆)

社会の課題を解決しようとする過程でその知識・技能を深化させるのみならず、実際の社会貢献を通じて専門職としての社会的役割を認識することも目的とした教育方法」と定義する。

さらに、高等教育におけるSLの先行研究^{15),16)}を参考に、「省察」と「互惠」を鍵概念とし、学生が地域社会で単に学ぶだけの一方的なものではなく、両者が対等な立場で、互惠関係が生まれるSL実践をめざした。

2. SL実施概要

A市における「健康まちづくり」事業は、2014年度から開始された小学校区単位における市民と行政および各種関係機関の協働によるヘルスプロモーションの理念を基盤とした健康づくり事業である。A市B校区は、2011年度より本学看護学生の健康教育等の演習受入れ校区であり、2016年度から市民主体の「健康づくり委員会」（以下、委員会）が発足し活動が展開されており、筆頭著者はこの委員会メンバーとして、発足年度から連携・協力してきた経緯があった。委員会では、これまでの活動を評価するための「健康まちづくりアンケート調査」（以下、「健康調査」）を実施することを決定し、この調査を本学との協働で実施することが委員会より提案された。

今回、本学の「公衆衛生看護活動論（看護学科3年選択科目）」の2単位45時間：23コマの内11コマにおいてSLを導入した。当該専門科目は、看護学生の地域アセスメントの知識・技術の獲得を目指す科目である。地域アセスメントとは、「地域の健康問題の解決などの目的に向け、系統的な情報収集と客観的な分析を行い、地域の特徴や課題を特定するプロセス」であり、地域の健康問題を解決するためには必要不可欠な看護スキルである¹⁷⁾。

「健康まちづくり」における「健康調査」は、地域の人々の健康状態とその要因を知りたいという「健康まちづくり」を担う市民組織のニーズそのものであった。そして、「健康調査」の集計・分析・報告は、当該科目学習目標の「既存資料や保健活動、地区踏査、地域の人々や関連機関からの多角的情報を統合し、顕在的・潜在的な健康課題について、根拠を持って説明することができる。」という学習目標に合致したものであった。よって、この「健康まちづくり」における看護学生の地域社会の課題を解

決しようとする社会貢献活動—すなわち、「健康調査」の集計・分析・報告—をSLと位置づけ、また、SLの定義における『実際の社会貢献を通じて専門職としての役割を認識すること』については、『実際の「健康調査」の集計・分析・報告を行うことによって専門職（看護師・保健師）としての役割を認識すること』と捉え、当該科目へSLの導入を決定した。本来、SLにおいては、市民で構成される委員会との調整や協議といった市民活動への参画活動を、学生が担うことが重要な要素であるが、著者が所属する大学の看護学科は、保健師選択制をとっている理由で、当該学年の履修科目が膨大であり、これらの時間を確保することが困難であることが予測された。そのため、当該科目責任者であり、なおかつ委員会に所属する著者が、事前に、本活動における学生と市民の役割分担について協議と調整を行い、委員会が「健康調査」内容の検討および調査用紙の回収までを行い、「健康調査」の集計・分析・報告の部分をSLと位置づけ学生が担当することとした。また、本研究では、SLの重要な要素である「対等な立場での互惠関係の構築」について、事前学習段階から理解を深め、「地域社会の課題を解決しようとする過程」—すなわち、「健康調査」の集計・分析・報告をどのように行うことが「健康まちづくり活動」に寄与できるかというモチベーションを持ちつつSL実践に取り組むこと—を学生らが経験できるよう科目内容を工夫した。

具体的には、限られた時間数において、学生が住民との対等な立場を理解し、互惠関係を構築できることをねらい、事前学習として、地域社会とのパートナーシップをキー概念とする地域アセスメント理論「コミュニティ・アズ・パートナーモデル」¹⁸⁾を用いて、住民との対等な関係性が地域アセスメントを行う上で基盤となることを学習した。さらに、SLにおいて学生自ら責任をもって関わっていく姿勢の醸成をめざし、「健康まちづくり」のこれまでの経緯やアンケートの主旨について、B校区市民（「健康まちづくり」委員会委員長）、校区担当保健師、科目責任者からの講義を組み込み、これまでの「健康まちづくり」に、市民や校区担当保健師が、どのような思いを持って取り組んで来たのか、さらに、学生の行う「健康調査」の集計・分析・報告が「健康まちづくり」においてどのような位置づけにあるのかについて学習する場を設けた。また、B校



図2 「健康まちづくり」アンケート結果報告会の様子

区の理解や興味・関心を深めるためにフィールドに出向き、地域の人々の暮らしを観察し、また、出会った人々にインタビューを行う等の地区踏査を行った。その後、委員会委員によって回収された「健康調査」の入力および集計・分析を行う際には、事前学習や地区踏査で得た情報を照らし合わせて統合し、委員会のニーズ（校区健康課題の明確化）に沿ったものになるよう学生ら自らが検討し、「B校区の健康および生活習慣の現状と課題」について委員会での報告会を実施した（図2）。この報告会では、学生が行った報告内容を題材にして、「健康まちづくりアンケート調査を健康まちづくり活動にかすための方策」について、参加した市民との対等な話し合いができる時間を設けた。

3. 評価時期および評価対象

本研究では、SL導入効果を評価するため、当該専門科目の開講前（201X年11月）をSL前、および科目終了後（201Y年2月）をSL後とし、質問紙調査を実施した。さらに、当該科目の成績確定の後（201Y年5月）に、グループインタビューを行った（図3）。対象学生は、本学専門科目「公衆衛生看護活動論」の受講学生、対象市民は、B校区健康づくり委員会の委員とした。

4. SL評価方法

本報告では、SLの導入および評価にあたり先行研究を探索し、SL先進国である米国での高等教育において、SLや同様のプログラムによる学生および市民への効果等を評価の詳細について解説している先行研究¹³⁾「社会参画する大学と市民学習—アセスメントの原理と技法—/Assessing Service-learning and Civic Engagement: Principles and Techniques」を活用し、SLを評価するために、学生・市民の質問紙調査、学生へのグループインタビューを実施した。グループダイナミクスを活用したグループインタビューは、各々の学びや気づきを再確認できるSLの省察につながると思ったが、対象市民組織の事前同意を得られなかったため、市民のグループインタビューは実施できず、学生のみ実施した。なお、学生・市民の質問紙調査は無記名自記式とし、同一の識別記号を付したSL前後用の調査用紙をSL前調査時に直接手渡し配布した。回収について、学生は、SL前後に回収箱を設け回収した。市民には、学生と同時期の回答を依頼し、郵送法で回収した。

4.1 学生を対象とした質問紙調査

学生の効果評価には、先行研究¹⁹⁾に則って「地域に根差した学びに関する学生への質問紙調査」を使

| 時期 | 看護学科3次生 (公衆衛生看護活動論履修学生) | 協働 | B校区健康まちづくり委員会 (校区自治協議会役員・自治会長等) |
|----------------------|--|----|---|
| 201W年度～ | | | ・健康まちづくり活動の評価方法の検討 →健康まちづくりアンケート調査の実施決定 |
| 201X年4～10月 | | | ・調査の内容・対象・方法の検討 →健康まちづくりアンケート調査対象等の決定 ・健康まちづくりアンケート調査の実施(印刷・配布) |
| 201X年11月 | <ul style="list-style-type: none"> ■SL前: 学生への質問紙調査 ・地域アセスメント方法等についての学習 ・B校区の健康まちづくりの経緯および地域特性の把握(授業への市民参加) ・B校区の地区踏査 | | <ul style="list-style-type: none"> ■SL前: 市民への質問紙調査 ・健康まちづくりアンケート調査の回収 ・学生への健康まちづくり活動の経緯と調査目的等の説明(委員長および地区担当保健師に大学での講義協力) |
| 201X年12月 ～201Y年1月 | <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート調査の入力・集計: 報告書作成 ・B校区健康まちづくり活動における保健事業計画の作成(地区踏査、アンケート集計結果などを教材として地域アセスメント後に作成) | | <ul style="list-style-type: none"> ・健康まちづくりアンケート調査報告方法の検討 ・健康まちづくりアンケート結果報告会(学生と市民の協働) |
| 201Y年2月 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域アセスメント～保健事業計画の振り返り ■SL後: 学生への質問紙調査(学生用) | | ■SL後: 市民への質問紙調査 |
| 201Y年5月 | <ul style="list-style-type: none"> ■成績確定後: 学生への質的評価(グループインタビュー) | | |

授業開講期間 11～2月(SL事前学習・省察を含む)
 健康まちづくり委員会への参画(SL実践期間)
 : 本研究における評価

図3 「健康まちづくり活動」におけるSL実践および評価の概要

用した。概念理解や技術の強化などの専門スキルの評価—すなわち当該科目の成績に直結する指標—は、認知バイアスが生じる可能性や調査対象が減少する可能性を勘案し、今回評価項目とせず、成績評価確定後行うグループインタビューにより把握することとした。

質問項目は、SL前:基本属性として、「年代」、「性別」、SL前後評価は、「地域に根差した学びを科目に取り入れた見解(2項目)」、「地域社会への関わりに対する態度(2項目)」とし、質問項目ごとのリッカートスケール(5段階)とした。

分析方法は、各項目の中央値を算出し、正規分布でない順位変数の平均値の比較検定に用いられるWilcoxon符号付順位検定を行った。統計ソフトSPSSver.25を用いた。また、SL後のみの質問項目「専攻や職業選択との関係(9項目)」、「経験の省察(7項目)」については、項目ごとに単純集計を行った。

4.2 市民を対象とした質問紙調査

市民の効果評価には、先行研究²⁰⁾に則って「地域

に根差した学びに関する地域のパートナーへの質問紙調査」を使用した。質問項目は、SL前:基本属性として、「大学と関わりを持っている期間」、「所属組織」、SL前後:「組織活動への影響(8項目から選択、複数回答可)」、「直面した課題(8項目から選択、複数回答可)」、「大学との関わりへの有益性(4項目から選択、複数回答可)」、SL後:「あなたが大学に与えた影響(5項目から選択、複数回答可)」、「この経験による大学への理解の変化(5項目から選択、複数回答可)」、「大学との関わりにおける満足度(6項目についてリッカートスケール5段階評価)」とした。SL前の属性、およびSL後の単発回答の質問項目については、項目ごとに単純集計を行った。

分析方法は、SL前後の対応がある2値型データの比率の差を検定するMcNemar検定を行った。統計ソフトは、SPSSver.25を用いた。

4.3 学生を対象としたグループインタビュー

SLを導入した学習を省察し、看護基礎教育においてSLを導入する意義と今後の課題を明らかにす

るために、グループインタビューを実施した。インタビューガイドの項目は、先行研究²¹⁾を参考に、「学生自身の学習目標」、「経験に対する自己評価」、「地域のパートナーとのやり取りの具体例」、「地域や社会一般について学んだこと」、「活動と講義とのつながり」等とし、約60分間のグループインタビューを1回実施した。

分析方法は、逐語録を作成した上で、学生におけるSLを導入した学習の省察に関する内容に焦点化し、語りの文脈が持つ意味を損なわないよう、一つの意味内容ごとに抽出しコード化した。コード化したものを、SLに取り組んだ学生への効果評価指標、「学生へのアセスメントマトリックス (Matrix for Student Assessment; 以下, MSA)」²²⁾の枠組みを用いて演繹的に分類を行った。このMSAは、SLによる学生への効果を10概念および各概念を構成する29指標で評価する枠組みである。MSAの概念・指標別の演繹的分類を行う際は、その妥当性を高めるために、共同研究者と概念・指標との整合性について複数回の検証を重ねた。さらに、概念・指標別のコードの占有率(全コードに占める割合)算出しその分布を把握した。

5. 倫理的配慮

本研究は、熊本保健科学大学ライフサイエンス倫理審査委員会(承認番号18052)の承認を受けて実施した。研究参加に際し、学生には、当該科目履修者が確定した時期(授業開講前)に科目責任者以外

の共同研究者が、市民には、委員会に所属しない共同研究者が、口頭と文書で説明し、文書にて研究参加の同意を得た。説明・同意内容は、研究趣旨、研究不参加の場合も不利益のないこと、成績判定とは一切関係ないこと、個人が特定されないようプライバシーを保護すること等とした。また、画像の公開については、文書にて同意が得られたもののみ使用した。

Ⅲ 結果

1. 学生の質問紙調査結果

1.1 対象の基本属性および回答状況

当該科目受講学生22人中、研究参加同意が得られた21人を評価対象とした。対象学生の年齢は20~21歳、性別はすべて女性であった。さらに、質問紙調査の回収率は、SL前100%(21人中21人)、SL後76.2%(21人中16人)であり、これらの有効回答率は、SL前後ともに100%であった。

1.2 質問紙調査結果

SL前後共に回答が得られた16人について、SL前後評価を行った(表1)。全体的にスコアの上昇を認め、「地域社会で活動することは、私の進路の明確化に役立つ」、「私には地域社会を支える責任がある」、「私は地域社会に変化を及ぼすことができる」において、有意差を認めた($p < .05$)。

SL後評価の集計結果を以下に示す(表2)。評価

表1 学生の質問紙調査結果 (SL前後評価: $n=16$)

| | SL 前 | | SL 後 | | p 値 |
|---|------|-------|------|-------|--------|
| | 中央値 | 四分位範囲 | 中央値 | 四分位範囲 | |
| 質問1 地域に根差した学びを科目に取り入れた見解 | | | | | |
| ・地域社会で活動することは、私にとって自分自身の強みや弱みを明らかにするのに役立つ | 4 | 3-4 | 4 | 4-5 | .054 |
| ・地域社会で活動することは、私の進路の明確化に役立つ | 4 | 3-4 | 4 | 3.5-5 | .038 * |
| 質問2 地域社会への関わりに対する態度 | | | | | |
| ・私には地域社会を支える責任がある | 3.5 | 3-4 | 4 | 3.5-5 | .046 * |
| ・私は地域社会に変化を及ぼすことができる | 3 | 2-3 | 4 | 3-4 | .018 * |

※リッカートスケール5段階(1.全くそうは思わない ~ 5.とてもそう思う)の前後比較について、Wilcoxonの符号付順位検定(有意確立* $p < .05$)を行った

表2 学生への質問紙調査結果 (SL 後評価: n=16)

| | | 1 全くそうは 思わない | 2 そうは 思わない | 3 どちらとも いえない | 4 そう思う | 5 とても そう思う |
|--|--------|--------------------|------------------|--------------------|------------|------------------|
| ■ 専攻や職業選択との関係 | | | | | | |
| ・地域社会の活動に参加したことで、自分が学んでいることが、日々の生活の中にどう役立つかを理解できた | n % | 0 0.0 | 0 0.0 | 0 0.0 | 10 62.5 | 6 37.5 |
| ・地域社会の活動に参加したことで、この科目での講義や授業内容をより理解することに役立った | n % | 0 0.0 | 0 0.0 | 0 0.0 | 8 50.0 | 8 50.0 |
| ・地域社会での活動の代わりに、教室での授業に時間をもっと増やした方が、この科目からもっと多くを学べたと感じる | n % | 1 6.3 | 6 37.5 | 4 25.0 | 2 12.5 | 3 18.8 |
| ・地域社会での活動は、自分の住む地域社会にもっと関わるにはどうしたらよいかを示してくれた | n % | 3 18.8 | 5 31.3 | 8 50.0 | 0 0.0 | 0 0.0 |
| ・地域社会での活動は、地域社会にとって有意義なものであったと感じている | n % | 0 0.0 | 0 0.0 | 0 0.0 | 10 62.5 | 6 37.5 |
| ・この科目が終了したら、この地域でボランティア活動を行ったり、参加したりすることはないと思う | n % | 0 0.0 | 0 0.0 | 0 0.0 | 8 50.0 | 8 50.0 |
| ・この科目で関わった地域社会での活動によって、自分の住む地域社会が抱えるニーズに、目を向けるようになった | n % | 0 0.0 | 1 6.3 | 2 12.5 | 11 68.8 | 2 12.5 |
| ・この科目で関わった地域社会での活動によって、私がどんな職業に就きたいかを決めるのに役立った | n % | 0 0.0 | 1 6.3 | 4 25.0 | 8 50.0 | 3 18.8 |
| ・この科目でやり遂げた活動は、卒業後に就く仕事における自分の価値を向上させるものであったと感じている | n % | 0 0.0 | 2 12.5 | 0 0.0 | 8 50.0 | 6 37.5 |
| ■ 経験の省察 | | | | | | |
| ・多くの人は、地域社会に変化をもたらすことができる | n % | 0 0.0 | 0 0.0 | 1 6.3 | 10 62.5 | 5 31.3 |
| ・地域社会の活動に参加したことで、科目を担当する教員と良い関係を築くことができた | n % | 0 0.0 | 0 0.0 | 1 6.3 | 11 68.8 | 4 25.0 |
| ・自分自身の文化より、地域社会の文化と協力して、気持ちよく活動できた | n % | 0 0.0 | 0 0.0 | 3 18.8 | 8 50.0 | 5 31.3 |
| ・地域社会での活動は、私自身が持っている偏見や先入観に気づかせてくれた | n % | 0 0.0 | 0 0.0 | 3 18.8 | 10 62.5 | 3 18.8 |
| ・地域社会での活動は、プロジェクトを計画し、達成する方法を学ぶことに役立った | n % | 0 0.0 | 0 0.0 | 2 12.5 | 12 75.0 | 2 12.5 |
| ・地域社会での活動に参加したことで、リーダーシップの技能を高めることに役立った | n % | 0 0.0 | 0 0.0 | 8 50.0 | 8 50.0 | 0 0.0 |
| ・地域社会での活動に参加したことは、実際の社会環境の中で、自分自身のコミュニケーション能力を高めることに役立った | n % | 0 0.0 | 0 0.0 | 2 12.5 | 13 81.2 | 1 6.3 |

項目において、「そう思う」・「とてもそう思う」の回答（以下、ポジティブ評価）割合が9割以上を占めた項目は、「地域社会の活動に参加したことで、自分が学んでいることが、日々の生活の中にどう役立つかを理解できた」、「地域社会の活動に参加したことで、この科目での講義や授業内容をより理解することに役立った」、「地域社会での活動は、地域社会にとって有意義なものであったと感じている」、「この科目でやり遂げた活動は、卒業後に就く仕事

における自分の価値を向上させるものであったと感じている」といった職業選択に関連するものであった。さらに、科目内容への効果について、「地域社会での活動の代わりに、教室での授業に時間をもっと増やした方が、この科目からもっと多くを学べたと感じる」では、「全くそうは思わない」・「そうは思わない」の回答が全体の約4割であったが、ポジティブ評価が約3割であり、回答にばらつきを認めた。

表3 市民の質問紙調査結果 (SL 前後評価: n=19)

| | SL 前 | | SL 後 | |
|--------------------------------|-------------|------|-------------|-------|
| | 「はい」 回答数 | % | 「はい」 回答数 | % |
| 質問1 大学との関わりは、地区組織の運営・活動に影響したか | 17 | 89.5 | 19 | 100.0 |
| ・運営についての新たな知識を得た | 7 | 36.8 | 12 | 63.2 |
| ・活動の方向性が変化した | 7 | 36.8 | 6 | 31.6 |
| ・活動に参加する市民が増加した | 6 | 31.6 | 9 | 47.4 |
| ・活動の質が向上した | 9 | 47.4 | 10 | 52.6 |
| ・予算やその他の資源を活用する力が向上した | 1 | 5.3 | 2 | 10.5 |
| ・新たなネットワークができた | 8 | 42.1 | 7 | 36.8 |
| 質問2 大学との関わりで、直面した課題はあったか | 8 | 42.1 | 4 | 21.1 |
| ・時間の確保 | 3 | 15.8 | 3 | 15.8 |
| ・学生の準備不足 | 1 | 5.3 | 0 | 0.0 |
| ・学生の数が多すぎた | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 |
| ・学生の数が少なすぎた | 1 | 5.3 | 1 | 5.3 |
| ・大学の科目の目標と組織活動の不一致 | 1 | 5.3 | 1 | 5.3 |
| ・教員との連携不足 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 |
| ・期待したほど学生が参加した効果がなかった | 4 | 21.1 | 2 | 10.5 |
| 質問3 大学との関わりは、地区組織の運営・活動に有益だったか | 15 | 78.9 | 18 | 94.7 |
| ・活動の価値が向上した | 12 | 63.2 | 14 | 73.7 |
| ・プロジェクトを完了できた | 1 | 5.3 | 2 | 10.5 |
| ・大学の技術や専門性を活用できた | 7 | 36.8 | 7 | 36.8 |

※ McNemar 検定 有意確立 $p < .05$ で有意差なし

2. 市民の質問紙調査結果

2.1 対象の基本属性および回答状況

対象市民42人中、研究参加同意が得られた29人を評価対象とした。対象市民の「大学との諸活動に関わってきた期間」は、「3年以上5年未満: 34.6%」がと最多を占めた。また、所属は、「自治協議会関連組織: 72.5%」, 「公的機関: 10.5%」, 「その他: 17.1%」であった。さらに、質問紙調査の回収率は、SL 前100% (29人/29人), SL 後76.2% (19人/29人) であった。これらの有効回答率は、SL 前89.7% (26人/29人), SL 後100% (19人/19人) であった。

2.2 質問紙調査結果

SL 前後共に回答の得られた19人について効果分析を行った(表3)。SL 前後で、問1「大学との関わりは、地区組織の運営・活動に影響したか」の選択肢「運営についての新たな知識を得た」(前:

36.8%・後: 63.2%), 「活動に参加する市民が増加した」(前: 31.6%・後: 47.4%), および、問2「大学との関わりで、直面した課題はあったか」(前: 42.1%・後: 21.1%), 「期待したほど学生が参加した効果がなかった」(前: 21.1%・後: 10.5%) であったが、前後の回答に有意差を認めなかった。

3. 学生のグループインタビュー結果

3.1 対象の基本属性

対象学生22人中、同意および協力が得られた学生8人が60分間のグループインタビューに参加した。対象学生の年齢は20~21歳、性別はすべて女性であった。

3.2 グループインタビュー結果

インタビューデータから103コードを抽出した。さらにコード化したデータをMSAの枠組みに沿って演繹的に分析した結果、10概念23指標に該当した

表4 学生インタビューの質的演繹的分析：
「学生へのアセスメントマトリックス」²²⁾による概念別・指標別のコード占有率

| 概念 | 占有率 | 指標 | コード数 | 占有率 |
|----------------------|-------|---------------------------------------|------|-------|
| 1. 地域社会に対する気づき | 13.6% | 1 地域の課題についての知識 | 3 | 2.9% |
| | | 2 地域の強みやニーズを明らかにする能力 | 5 | 4.9% |
| | | 3 コミュニティの強み, 問題, 資源の理解 | 6 | 5.8% |
| 2. 地域社会への参画 | 9.7% | 4 相互作用の量と質 | 0 | 0.0% |
| | | 5 参画への態度 | 6 | 5.8% |
| | | 6 地域のパートナーと学生間の相互依存 | 0 | 0.0% |
| | | 7 地域からのフィードバック | 4 | 3.9% |
| 3. 貢献活動に関する関与 | 25.2% | 8 現在の貢献活動経験への態度 | 4 | 3.9% |
| | | 9 将来行う貢献活動に関する計画や障壁 | 12 | 11.7% |
| | | 10 貢献活動を求められたり, 困難に出くわした際の反応 | 10 | 9.7% |
| 4. 多様性に関する感受性 | 5.8% | 11 多様性に関する理解と態度 | 2 | 1.9% |
| | | 12 新たなコミュニティについての知識 | 2 | 1.9% |
| | | 13 地域社会の環境での自信と安心 | 2 | 1.9% |
| 5. キャリア開発 | 4.9% | 14 キャリア選択, 機会 | 0 | 0.0% |
| | | 15 キャリアに関連した職業的技術の向上 | 5 | 4.9% |
| | | 16 貢献活動の経験に関連したキャリア準備の機会 | 0 | 0.0% |
| 6. 科目内容への理解 | 13.6% | 17 内容を理解し, 応用する際の地域社会での経験の役割 | 5 | 4.9% |
| | | 18 地域社会での経験と科目内容との関連性への気づき | 9 | 8.7% |
| 7. コミュニケーション | 1.9% | 19 明確な技術向上への気づき | 1 | 1.0% |
| | | 20 コミュニケーションの重要性の認識 | 1 | 1.0% |
| | | 21 口頭や記述での立証できる確かな能力 | 0 | 0.0% |
| 8. 自己認識 | 19.4% | 22 自分の強みや限界, 目標, 不安への気づき | 19 | 18.4% |
| | | 23 これまでの根拠のない思い込みを改めること, 信念をきちんと述べること | 1 | 1.0% |
| 9. 独立心 | 8.7% | 24 教員からの自律と独立 | 7 | 6.8% |
| | | 25 関係性の中での学習者や提供者としての役割意識 | 2 | 1.9% |
| | | 26 地域でのプロジェクトに対する責任感 | 0 | 0.0% |
| 10. 多様な先生の実在に価値を置くこと | 23.3% | 27 学びにおける学生同士の役割 | 1 | 1.0% |
| | | 28 学びにおける地域のパートナーの意識と役割 | 5 | 4.9% |
| | | 29 学びにおける教員の役割 | 18 | 17.5% |

※複数の指標に含まれるコードがあるため、コード数計は、全コード数103を上まわっている。占有率は全103コードあたりを示す。

(表4)。また、これらの概念・指標に該当した代表的なコードを表5に示した。

概念別にみると、「概念3. 貢献活動に関する関与」25.2%、「概念10. 多様な先生の実在に価値を置くこと」23.3%、「概念8. 自己認識」19.4%、「概念1. 地域社会に対する気づき」・「概念6. 科目内容への理解」13.6%の順に占有率が高かった。

また、当該科目の学習目標に関連する学生の語り(以下、イタリック体表記)として、「指標1. 地域の課題についての知識」の「地域コミュニティの人々に関する情報や問題点は教科書のシンプルさと比べ、複雑に絡み合っていることに気づいた」、

「指標3. コミュニティの強み, 問題, 資源の理解」の「住民が校区のために、アンケート報告会のために夜にわざわざ大学に集まって来られたというところに驚き, すごいことだと感じた」、

「指標18. 地域社会での経験と科目内容との関連性への気づき」の「自治会長さん, 民生委員の方について, 講義のみでは役割や存在感がわからなかったが, 実際に活動を見ることで学びが深まる」、

「実際の話を聞き, 実際に動いてみるという体験がないと(学習目標の)理解が深まらない」等があった。

表5 学生インタビューの質的演繹的分析：
「学生へのアセスメントマトリックス」²²⁾による指標別の代表的なコード

| 概念 No | 概念名 | 指標 No | 指標名 | 代表的なコード |
|----------|-------------|----------|--------------------------|--|
| 1 | 地域社会に対する気づき | 1 | 地域の課題についての知識 | ・(地域コミュニティの人々に関する) 情報や問題点は教科書のシンプルさと比べ、複雑に絡み合っている(ことに気づいた)。 |
| | | 2 | 地域の強みやニーズを明らかにする能力 | ・教科書の「地域のニーズ把握」があまりに膨大に思えた(具体的方法がつかめなかった)が、アンケートを見ることによって(住民さんの) ニーズが伝わってきた。 |
| | | 3 | コミュニティの強み、問題、資源の理解 | ・(住民が) 校区のために、アンケート報告会のために夜にわざわざ大学に集まって来られたというところに驚き、すごいことだと感じた。 ・様々な団体がうまく連携していくということは、実際には難しいことも多いのではないかと思った。 |
| 2 | 地域社会への参画 | 5 | 参画への態度 | ・実際の話を聞き、実際に動いてみるという体験で理解を深めたいと思った。 |
| | | 7 | 地域からのフィードバック | ・アンケート結果のアセスメントは、確かに事実を述べているにとどまっていたし、考察を含むアセスメントができていなかったと感じた。だから、住民に「何にどうにかすのか?」と質問されたのだと感じた。 |
| 3 | 貢献活動に関する関与 | 8 | 現在の貢献活動経験への態度 | ・授業で習った地域把握の方法を、実際に活用する中で、自身の課題や困難な点を明らかにしたいと思い取り組んだ。 |
| | | 9 | 将来行う貢献活動に関する計画や障壁 | ・最初にもらった情報量が多くて戸惑ってしまったので、最初はもう少し限られた情報について、校区全体をアセスメントしてみんなで理解した上で、グループで分担するという段階的な進め方が、わかりやすかったと思う。 ・私たちは、アンケートの集計を結構頑張ったが、アセスメントが不足していると思うので、後輩たちにデータを使ってアセスメントを深めて欲しい。 |
| | | 10 | 貢献活動を求められたり、困難に出くわした際の反応 | ・(本科目の中でアンケートの入力分析を行い、地域の健康課題を見出すには) 確実に時間が足りなかった。(アンケート結果のアセスメントは、) グループワークで進めていったので、(授業外の時間で自主的に) 進めることができなかった。 ・アンケート集計時に、PCが使えない学生がいて、入力作業で手間どってしまった。1年次の授業資料をきちんと活用出来たらよかった。 |
| 4 | 多様性に関する感受性 | 11 | 多様性に関する理解と態度 | ・学生が作成したマップやアンケート結果についての、住民の率直な感想を聞き、立場で見方や意見が変わるということを学んだ。 |
| | | 12 | 新たなコミュニティについての知識 | ・校区の力・地域の力を感じた。 ・(アンケート報告会の後に自治協議会が行われていた中で) 道路の問題について、改善された話が出ていたことから、(自治会の中で) 住民の意見が反省されていたのを知り、住民が意見を言うことは大事だと思った。 |
| | | 13 | 地域社会の環境での自信と安心 | ・(地域アセスメントの過程で、目標としていた校区の健康課題を見出すことにつながったことで) できたという達成感を感じた。 ・(住民さんとの関わりでは、) 地区踏査をマッピングしたものについて、住民が興味関心を持って見てくれていたのがうれしかった。 |
| 5 | キャリア開発 | 15 | キャリアに関連した職業的技術の向上 | ・アンケート結果の(報告する際)、大勢の住民さんへの伝え方やちょっとした工夫点がわかった。 |
| 6 | 科目内容への理解 | 17 | 内容を理解し、応用する際の地域社会での経験の役割 | ・私たちは、アンケートの集計から、集計・分析の方法を学んだ。 ・(自治会への報告会において) その場にいるだけで、地域の状況(保育園の情報交換など)や住民さんが集まり話し合いがされている現状を見るだけでも多くを学んだ。 |
| | | 18 | 地域社会での経験と科目内容との関連性への気づき | ・自治会長さん、民生委員の方について、講義のみでは役割や存在感がわからなかったが、実際に(自治会の活動を) 見ることで学びが深まる。 ・実習も控えており、アンケート等の資料から情報を整理する方法を知りたいと思った(目標とした)。 ・実際の話を聞き、実際に動いてみるという体験がないと(学習目標の) 理解が深まらない。 |

| 概念 No | 概念名 | 指標 No | 指標名 | 代表的なコード |
|----------|------------------|----------|-----------------------------------|---|
| 7 | コミュニケーション | 20 | コミュニケーションの重要性の認識 | ・実際に人と関わり話を聞くことに関して、聞きたいことが聞けない、言葉選びが難しいことに気づいた。 |
| 8 | 自己認識 | 22 | 自分の強みや限界、目標、不安への気づき | <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート入力数が多く、授業内で終わらず、結果的に先生に負担をかけた。 ・アンケート結果をアセスメントする時、表から読み取れることを文章化しただけで、それが正解かわからないままに終わった。そこが、難しかった。 ・アンケート結果のアセスメントは、「国民衛生の動向」みたいに、社会の動き等を加味した分析が必要なのかと思ったが、そこまでできず、表から読み取れることを書いて終わった（それでは不十分だったのかもしれないという思いも残った）。 ・アンケート報告会の際に、住民に「何にどういのかすのか？」と質問された時、グサッときた（傷ついた）。 ・アンケートそのものの量が多かったので、（全部をみんなでアセスメントするというのは）難しかったのかもしれないが、他の方法もあったのかもしれない。 ・（地域アセスメントの過程では、）地区踏査等で校区のことを調べて、その後アンケートの入力や集計に進んだが、そのつながりがわからなかった。 ・自分たちが担当した部分しか頭に残っていない中、アンケートの入力・アセスメントを行うことになったので、アンケートの今後活動したいことなどの自由記述に書かれていたことについて、対策にうまく反映できなかった。 |
| | | 23 | これまでの根拠のない思い込みを改めること、信念をきちんと述べること | ・住民は展示したマップなどには興味をもたれないだろうという先入観があった。 |
| 9 | 独立心 | 24 | 教員からの自律と独立 | <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート集計など、先生に負担をかけたが、共に戦ってくれた戦友みたいと感じた。 ・先生たちがルールを敷いてくれるのはありがたいが、学生の意見を生かしつつサポートして欲しい。先生の考えに修正するのは、違うのではないかと思う。 |
| | | 25 | 関係性の中での学習者や提供者としての役割意識 | ・（住民さんとの関わりで学んだことは、）地域を知ろうとする学生と住んでる住民は立場が違う。学生が作成したマップやアンケート結果についての、住民の率直な感想を聞き、立場で見方や意見が変わるということを学んだ。 |
| 10 | 多様な先生の存在に価値を置くこと | 27 | 学びにおける学生同士の役割 | ・学生のみんが協力してアセスメントした結果を把握して初めて、校区の傾向がわかった。 |
| | | 28 | 学びにおける地域のパートナーの意識と役割 | <ul style="list-style-type: none"> ・（新たな疑問として）今回の地域の活動で、保健師だけでなく行政機関、民間企業、民生委員、有志の人など色々な団体が連携しているが、どうして連携できているのか、連携がどのように広がっていくのかと疑問に思った。 ・（関心を持ったことは、）アンケート報告会には多様な人々が集まって、色々な発言をされていた。 |
| | | 29 | 学びにおける教員の役割 | <ul style="list-style-type: none"> ・（先生は）アンケートの集計から住民への結果報告会まで、学生と住民の間の橋渡し役を担っていた。 ・（先生も）学生と一緒に調査にあたることを楽しんでいたり、アドバイスももらえた。 ・今回は、先生も学生と一緒に地域のことを把握しつつ、これまでの知識や経験を基に学生にアドバイスを与える、アドバイザーのような役割であった。 ・先生は、健康まちづくり委員会に参加し、保健師との連携もあって、学生が関われることを探して、学生につないでくれるところがすごいと思った。 ・先生は、学生みんなと一緒に作りあげてくれることを意図して関わっており、信頼も大きかったし、相談しやすかった。 ・先生は、学生の意見をくんでくれたし、学生に寄り添いつつ、知識と技術を持っていて意見も言ってくれた。 ・外部の人との関わりの中で、学生が言いにくいことは、助け船を出してくれて、とても相談しやすかった。 |

IV 考察

1. SLによる学生への効果について

学生における質問紙調査によるSL前後評価では、「進路の明確化」、「地域社会を支える責任」、「地域社会に変化を及ぼす可能性」において、肯定的な変化を認めた。これらの理由として、「健康まちづくり」におけるSLにおいて、市民とのダイナミックな取り組みの中で、より具体的な看護師の役割や責任を認識し、また、地域アセスメント技術をいかした責任ある役割を果たしたことで、地域社会に変化を及ぼした手応えを学生らが認識できたのではないかと考えられる。また、SL後の評価において、「学習の内容理解の深化」、「今回の地域活動の社会的意義」などを含む16項目中10項目において、肯定的な変化を認めたことから、自身の学びの深化やその後の学習モチベーションやコミュニケーション能力の向上を認識した学生が増加したことが考えられる。グループインタビューでの、「地域コミュニティの人々に関する情報や問題点は教科書のシンプルさと比べ、複雑に絡み合っていることに気づいた」、「教科書の「地域のニーズ把握」があまりに膨大に思え具体的方法がつかめなかったが、アンケートを見ることによって、住民のニーズが伝わってきた」等の語りから、机上の学習のみで理解を深めることが困難な「地域社会における、健康問題の要因の複雑さ」や「地域の健康ニーズの把握」について学習内容の理解が深まったことが伺われる。看護専門職が行う地域アセスメントでは、量的データと、地区踏査や参加観察によって、実際にフィールドに出向き収集する質的データの双方による適切な地域アセスメントが、市民の健康への寄与等の最善の効果をもたらすために必要である²³⁾とされる。学生がアンケート調査の量的データを分析し、さらに、実際にフィールドに出向いて、市民の意見や反応等の生きた質的データを収集できた。「地区踏査をマッピングしたものについて、住民が興味関心を持って見てくれていたのがうれしかった」という学生の語りからも、ダイナミックな市民と学生の互惠関係は、学生達の学習モチベーション向上やさらなる学習意欲の向上に有効であることが推察される。また、「アンケート報告会の際に、住民に「何にどういのか?」と質問された時、グサツときた(傷ついた)」という学生の語りから、地域アセスメントの結果報

告というゴールを見据えた活動の中で、自身の限界を痛感する経験をしていたことがわかる。しかし、限られた時間の中で「学生のみなが協力してアセスメントした結果を把握して、校区の傾向がわかった」等との語りもあり、学生同士協力して、困難を乗り越えた経験があったことも伺えた。市民への直接的な貢献活動を担うSLにおいては、学内演習と比較し、学生らが、自身の限界を認識し、さらにそれらを克服する機会を得ることが考えられ、貴重な意味を持つと考えられた。

これらより、今回のSL導入は、「地域の人々や関連機関からの多角的情報を統合し、顕在的・潜在的な健康課題について、根拠を持って説明することができる」という学習目標の達成に寄与し、また、社会に働きかける看護職の具体的な活動のイメージ化や、実際の社会貢献を通じた市民的責任や社会的役割の認識の向上等の一定の効果を確認することができたのではないかと考える。

2. SLによる市民への効果について

市民におけるSL前後の質問紙調査の比較検討では、大学との関わりにおける肯定的な回答割合が増え、否定的な回答割合が減少していたことから、今回のSLが、2011年からの家庭訪問等の校区での学生の演習受入れと比べて市民のニーズに応えるものであった可能性が考えられる。また、SLの中で実施した地域アセスメント報告会には、通常の会合時以上に市民が多く参集したことから、「活動に参加する市民の増加」という副次的な効果も認識されたと考えられる。

3. 看護学生の専門科目におけるSL導入の意義と今後の課題

今回の看護専門科目へのSLの導入により、当該学習目標の達成に寄与し、さらに看護技術の向上等の自己の成長を肯定的に捉えること、また、地域のニーズに応え、大学への肯定的な市民評価へとつなげることができたと考えられる。そのため、地域社会に目を向け、人々の健康に影響を与える社会的側面について思考し対応する能力を求められる看護職の養成においても、地域に貢献する大学教育においても、今回のSLは意義ある試みであったと考える。しかし、科目の学習目標とSL内容との関連が一部の学生に認識されなかったことや、リーダーシップ

を養う経験が一部の学生に偏った可能性が考えられ、授業科目内容とSLの関連づけの強化、およびリーダーシップを養う機会の平準化も、今後の課題と考えられる。また、看護専門科目の学習目標の到達のためには、SL実践内容と科目内容の整合性の調整といった教員側の事前準備や、看護学生側が事前にSLを理解し、エビデンスに基づく知識・技術を身に着ける実践へのトレーニングも必要であると考えられる。

4. 研究の限界

本研究では、看護専門科目においてSLの一部を導入したものであり、SLのすべてのプロセスを含むものではなかったこと、また、SL省察に重要な意味を持つ市民のグループインタビューが実施できなかったこと、先行研究を用いたSL評価を中心に先行看護技術—地域アセスメント技術—の効果評価はできなかったことに、本研究でのSL効果評価の限界がある。今後もSLの導入について、継続的に取り組み、体制を整え、研究を蓄積する必要があると考える。

V 結語

本研究では、看護学生の地域アセスメント技術の修得をねらう科目の一環として、「健康まちづくり」という市民活動における「健康調査」の分析・報告をSLの一部として実践し、学生および市民における効果を明らかにした。その結果、学生では、進路の明確化や、地域社会を支える責任感や効力感の向上、市民では、大学との関わりにおける肯定的な回答割合が増えたこと等の、SLの一定の効果が示唆された。

謝辞

本研究にご協力いただいた市民・行政機関の方々、看護学生の皆さん、そして前熊本保健科学大学保健科学部看護学科教授中村京子先生に心より感謝申し上げます。

また、本研究は、2019年度熊本保健科学大学大学教育改革推進プログラム助成(1-GS-3)を受け実施した研究であり、第78回日本公衆衛生学会総会および第29回日本看護学教育学会学術集会において本研

究の一部を発表したものである。

文献

- 1) 厚生労働省. 保健師助産師看護師法施行規則の一部を改正する省令, 厚生労働省令第179号, 2019.
- 2) Furco, A., *Service-Learning: A Balanced Approach to Experiential Education. Expanding Boundaries: Service Learning*, Washington D.C.: Corporation for National Service, 2006.
- 3) Mc Menamin, R., Mc Grath, M., et. al, Training socially responsive health care graduates: is service learning an effective educational approach? : *Med. Teach.* 36 (4), 291-307, 2014.
- 4) Bajracharya, S.M., *Community-based health education intervention: a servicelearning approach.* : *Forum Public Policy* 1-11, 2007.
- 5) 松谷美和子, 田代順子, 香春知永, 他. 看護教育法としての「サービス・ラーニング」実践研究文献レビュー. *聖路加看護大学紀要*, 30 : 37, 2004.
- 6) 田代順子, 大森純子, 平林優子, 他. 米国におけるサービス・ラーニング(地域参加型教育)の理念と取り組み—ウィスコンシン大学とワシントン大学の視察調査とワークショップ報告. *聖路加看護大学紀要*, 33 : 72, 2007.
- 7) 高橋恵子, 武石典史, 大久保暢子, 他. 聖路加国際大学における学部科目「サービスラーニング」の現状と課題. *聖路加看護大学紀要*, 4 : 85-90, 2018.
- 8) 田代順子. ヘルス・プロフェッショナル育成のためのe-サービス・ラーニング・プログラムの開発研究過程と学び. *聖マリア学院大学紀要*, 3 : 3-8, 2012.
- 9) 古城幸子, 木下香織, 栗本一美, 他. 平成18年度現代的教育ニーズ取組支援プログラムに選定: 地域のニーズに応える看護専門職養成—在宅高齢者支援プログラムとサービス・ラーニング. *新見公立短期大学紀要*, 27 : 159-167, 2006.
- 10) 三橋恭子, 田代順子, 小澤道子, 他. ヘルス・ボランティア指向のある看護大学生の『身近な

- 健康問題とケア』の認識とボランティア経験.
聖路加看護大学紀要, 8 (1) : 36-43, 2004.
- 11) 福留東土. 日本の大学におけるサービス・ラーニングの動向と課題. 比較教育学研究 2019 (59) : 120-138, 2019.
 - 12) 市川享子, 秋元みどり. サービス・ラーニングと社会変容のための評価枠組みの構築. 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 30 (0), 43. 2018.
 - 13) Gelmon, S. B., Holland, B.A., Spring, A., Kerrigan, S. M., Driscoll, A. Assessing service-learning and civic engagement: principles and techniques., campus compact. 2001 / 山田一隆, 市川享子, 斎藤百合子, 福井里江, 村上哲也, 中原美香訳. 社会参画する大学と市民学習: アセスメントの原理と技法, 東京: 学文社. 2015.
 - 14) 松谷美和子, 田代順子, 香春知永, 他. 看護教育法としての「サービス・ラーニング」実践研究文献レビュー. 聖路加看護大学紀要, 30 : 32-33, 2002.
 - 15) 津曲隆. サービスラーニング評価のための分析枠組みに関する考察. アドミニストレーション 19 (2) : 103, 2013.
 - 16) 桜井政成, 津止正敏. ボランティア教育の新地平: サービスラーニングの原理と実践, 京都: ミネルヴァ書房. 10, 2009.
 - 17) 田口敦子. 公衆衛生看護活動の展開方法, 標準保健師講座1 公衆衛生看護学概論第6版. 医学書院: 110-111, 2022.2.
 - 18) Anderson, E. T., McFarlane, J. M., 金川克子, 早川和生. (2007). コミュニティアズパートナー: 地域看護学の理論と実際 (第2版). 医学書院.
 - 19) 13) に同じ. 54-56, 2015.
 - 20) 13) に同じ. 149-151, 2015.
 - 21) 13) に同じ. 62-63, 2015.
 - 22) 13) に同じ. 38-42, 2015.
 - 23) 中板育美. 地域診断から始まる見える保健活動実践推進事業報告書: 平成22年度地域保健総合推進事業, 2011.

(令和6年2月9日受理)

Investigation of the Effectiveness of Introducing Service Learning in a Nursing Course: Through the Practice of Tabulating, Analyzing, and Presenting Health Surveys

Yoko TOWATARI, Yoshimitsu ARAKI

Abstract

Purpose: The purpose of this study was to clarify the effects on nursing students and the citizens of introducing some service-learning programs in nursing courses, and to examine future issues.

Methods: We conducted questionnaire surveys among students and citizens before and after we administered service-learning. We also implemented group interviews for students to deductively analyze service-learning using an evaluation index from previous studies.

Results: We used a pre-post study comparison based on valid responses from the questionnaire surveys (16 students, 19 citizens). As a result, improvements were observed in the percentage of positive responses in the clarification of career paths and in the sense of responsibility and efficacy in supporting the local community among nursing students, and in the relationship with the university among citizens.. Group interviews for students indicated that “involvement in social contribution activities” was the most discussed topic.

Observation: This study suggested certain benefits of partial implementation of service-learning in nursing students and citizens. However, challenges and limitations due to the partial introduction were acknowledged.

Key Words : service-learning, nursing students, citizens, efficacy